

ハーバード大学で学ぶということ

小林亮介 (Harvard College, Class of 2013)

1 はじめに：Introduction

(1) 自己紹介

私は 2009 年春に私立桐朋高校を卒業し、4 月より一橋大学法学部に進学、8 月をもって休学し現在ハーバード大学の学部課程の 1 年目に在学中の学生である。このたびは、一橋大学で大変お世話になった佐野先生より「ハーバード大学で学ぶということ」をテーマに経験やカリキュラムなどの情報を共有させてくれるようにとのご依頼を受け、本稿を執筆させていただくことになった。私のような者にこのような機会をいただけたことを、まず深くお礼申し上げたい。

まず個人的なバックグラウンドについて軽く触れさせていただくと、私は日本に生まれて、とくに目立った海外経験もないまま、中学受験を経て私立中高一貫校に進学した「普通の」日本人である。そんな私がハーバード大学に出願するきっかけとなったのは、高校 2 年夏から 1 年間を交換留学でアメリカのオレゴン州で過した際、飛び級してシニア（高校 3 年）となって、周りの友人が大学に出願するプロセスを間近で見ることとなった影響で、アメリカの大学への進学をひとつの選択肢として考えるようになったことである。高校時代より国際関係論の領域に興味を抱いたこともあり、国際関係論を学べる環境を基準に出願する大学を選考した際、その観点から、この分野の研究の本場であるアメリカ、また国際公用語である英語圏で学べるという点に、ハーバード大学をはじめとする国際関係論に秀でる数校のアメリカの大学の魅力を感じ、高校 3 年の夏に留学から帰国後、国際関係論に秀でる国内の大学を受験するのと並行して出願することを決断した。その後 2009 年 4 月に一般受験を経て一橋大学の法学部に入学したが、その後ハーバード大学からも入学を認められたため、一橋でお世話になった教授陣の勧めもあり 8 月より休学、9 月からアメリカ、ボストンにあるハーバード大学の学部課程である Harvard College（以下ハーバード大学で統一）に新 1 年として入学して、現在在学中である。後述のように、ハーバード大学においては学部の概念は存在せず、さらに 2 年の

半ばまでは専攻 (Concentration) を決める必要はないが、先述の国際関係論への興味もあり、現在は Government (政治) 専攻を考えており、副専攻 (Secondary Field) には、見識を広げるために専攻とは違ったものをと考え、また高校時代よりのイタリア・ルネサンスの美術や建築への興味から、History of Art and Architecture (芸術・建築史) を考えている。まだハーバード大学で過ごしたのはわずか 1 年に満たないわけではあるが、そんな短期間でも驚き、感じ、経験したことを、日本の大学との違いに着目しながら日本人の視点で紹介していければと思う。

(2) アドミッション・プロセスに見るハーバード大学の価値観

アメリカの大学におけるアドミッション・プロセスは日本のそれとは大きく異なる。大学受験といえば入試といった、日本の常識は全く当てはまらない。日本の高校から出願を考える場合には、英語力以上に、実はその情報収集の側面が最も大きな壁となると経験者は口をそろえる。Admission Office (入学事務局) により統括されるそのシステムは、日本の AO 入試のモデルともなっている。アメリカのセンター試験に当たる共通試験である SAT や、高校で学習した大学レベルの内容を審査する AP Exam、留学生にとっては TOEFL 等のテストの成績が要求されるのはもちろんであるが、これら成績は評価基準の「1 項目」であるにすぎず、日本のようにこれらテストの点数、数値的要素如何で合否が決定されるわけではない。現に毎年 SAT で 2400 点満点を取りながら入学を認められない学生が何人も存在する一方、私のように試験の点数がずば抜けて芳しいわけでは無くても入学が認められるケースも多く存在する。各大学は、プライベート・インスティテューションとして、「自らが欲しい生徒を選抜する」という価値観を大前提に有しており、それぞれ独自の選抜基準のもとに高校生を総合的に評価し入学を許可するわけである。

高校生は自分の全てをアプリケーションとしてまとめて大学に提出し、アドミッション・オフィサーとよばれる大学側の選抜官に自分自身をアピールすることとなる。近年、ほとんどの場合オンライン上で行われるこのアプリケーションには、テストの結果のほかにも、もっとも重要な基準として高校 4 年間の成績、課外活動とその成果、リーダーシップなどを振った役職、コンクールやコンテストでの入賞経験、職業経験、高校在学中・大学で履修したクラスや家族のステータス、人種や宗教的バックグラウンドなど、多岐にわたる情報を盛り込み、かつ認められている 1～2 枚のエッセーで自分自身を大学に売り込むこととなる。この際大学側が求めているのが、自分がその大学を選択した理由、何を学びたいかという動機などのみならず、それ以上に「入学を認めてくれれば自分が大学に何を提供できるか」という主体性であるという点は非常に興味深い。その他、自分をよく知る人物よりの推薦状、大学 OB による面接などの情報も大学へ送付される。事務局には数十人のアドミッション・オフィサーが

存在すると言われているが、彼らは生徒ひとりひとりに関して送られてきた全ての情報に事細かに目を通し、それを残りのオフィサーの前でプレゼンテーションした後に、長いディスカッションを重ねて1人の合否を決める。ハーバード大学の場合、1学年は1600人ほどであり、その枠を巡って毎年30000人以上もの出願があるにも関わらず、場合によっては1人につき数時間の時間を費やしてディスカッションを重ねる場合もまれではない。また出願と同時に Financial Aid と呼ばれる奨学金への申し込みも行う。これは、各家庭の収入などの財務状況に基づいて大学側が賞与する奨学金である。ハーバード大学においては、出身家庭を問わず平等な教育機会を提供する目的において、アメリカ市民権保有者、留学生関係なく、Need-blind かつ Full-need、つまり各家庭について大学側の計算で必要だと算出された分の学費、生活費などは全て大学側が負担し、かつその奨学金に申し込むことが学生の合否に影響を与えないことを保証している。この充実した奨学金システムにより、56000万ドルに及ぶと呼ばれる年間の費用の大半は賄われているのであるが、この制度への理解不足がハーバードは金持ちが行く学校という誤った印象を与えてしまっている。

ハーバード大学が盛んにその重要性を内外問わず主張するのが、その「ダイバーシティ」、多様性である。2009年度入学の私の学年において、男性49%に対し女性51%、留学生は全体の10%、人種も白人、アフリカン・アメリカン、アジア系、ヒスパニックとバランスが良い。学内には学問の天才がいる一方、すでにプロフェッショナルな音楽家がいったり、オリンピック候補選手もいたり、ブラウンに入学したエマ・ワトソンの例が新しい俳優や女優、著名人の子息や大富豪もいるなど、それぞれの学生が何かしらの特技や技能を有していたり、特別な経験を有していたりと飽きることが無い。これは大学側が意図的にこのような人の取り方をしているためであり、日本的な価値観に基づけば、「一芸入試」や「寄付による裏口入学」と批判されかねないが、アメリカではそういった個性、独自性を評価することこそが平等だと判断されており、こうした多種多様な学生が一堂に集い、寮で共同生活を送りながら4年間の学部生活を送ることによる相互刺激、相乗効果を期待している。裏を返せば、「自分が大学というコミュニティーにいかにか好影響を与えられるか」、「他の出願者と自分がいかに異なるのか」をアピールすることが、入学へのキー・ポイントとなるということである。

2 ハーバード大学のカリキュラム：Curriculum

(1) リベラル・アーツ教育とは

リベラル・アーツ教育とよばれるハーバード大学の学部課程における教育は日本ではあまりな

じみのないものかもしれない。ハーバード大学のみならず、アメリカの大学の学部課程では、リベラルアーツ・カレッジ（学部生の教育に重点を置いた少人数制大学）、研究型総合大学の学部課程を問わず、このリベラル・アーツ教育が主流をなしている。リベラル・アーツとは人文科学、自然科学、社会科学を全て包括するものであり、学部課程のうち一般教養を叩き込もうという趣旨を有している。いわゆる「教養学部」ということで、よく「専門的な内容は扱わない」と勘違いされがちであるが、実際には決してそうではなく、もちろん専門的なコースも多数存在するし、むしろ各々のコースにおいてはより深い内容まで踏み込むことも多い。では日本の大学と比較して何が違うのか。具体的には大きく、①入学時に専攻を決める必要が無い、②「学部」という概念が存在せず学校が提供するコースは全て受講可能、③ビジネス、医学、法学は取り扱わない、などの差異が挙げられる。つまり、ビジネス、医学、法学はそれぞれ高等学問、あるいは実用学問として、学部卒業後に進学可能なプロフェッショナルスクールにその教育を任せ、学部課程は、Harvard College としてひとつに統一されているのである。高校卒業後、学生は Harvard College の学生として一括して入学を認められ、実際に大学のコースを受講しながら、自分の興味を探っていくこととなる。学生は、大学入学後も、自分の専攻を見出すまでの1、2年の猶予が与えられているわけである。

学部が存在しない代わりに、政治・経済といったデパートメントが存在し、それぞれが専攻を認定することとなる。2年目には一応専攻を決定し、その専攻の名前をディプロマに持って卒業することとなるが、それはあくまで各専攻が要求するコース履修要件を満たすというだけのことにとどまらず、自分の興味のあるコースを選択・履修していき、結果的にその興味にもっとも適した専攻を「名乗る」ことになるという側面が強いように感じられる。もちろん自由選択科目の幅も広く、どの専攻を名乗っていても在学中を通しどのコースを履修しても構わない。日本の大学の学部課程から学部の壁・概念を取り払ってしまったものと想像すればわかりやすいであろうか。教養として履修するコース、専門科目として履修するコース、それぞれの組み合わせは学生自身で決定できるのである。また研究大学の特色を活かした、Cross Register（クロス・レジスター）と呼ばれるシステムが存在し、学年を問わず一部の授業を除くハーバードの大学院・プロフェッショナルスクールを含んだ大学の提供する全てのコースの履修が可能となっており、科目を問わず、個々人の興味、実力に応じて幅広くフレキシブルなカリキュラム設計が可能となっている。

（2）ハーバード大学のカリキュラム

ここで具体的にハーバードのカリキュラムを見ていくと、卒業に必要な共通の履修要件とし

て主に、① Expository Writing 20、② Foreign Language、③ General Education (Gen Ed) Requirement、④ Concentration Requirement、⑤ Secondary Field Requirement (任意) の5つが挙げられる。ハーバードでは2期制がとられており、1学期で4科目から5科目を履修するのが一般的なため、8学期で計32科目(+ α)のコースを履修する中で、これらの要求を満たさなければならないこととなる。

① Expository Writing 20¹

Expository Writing とは、高校レベルのライティングから質・量ともに大きくレベルが異なる大学レベルのライティング(レポートや論文など)への変化に対応するために1年の内に履修が義務づけられているコースである。ライティングを専門に扱う部門のもと、同名で異なる指導教官による20以上のコースが提供されており、芸術、政治、写真など、自分の扱いたい、書きたいテーマに沿ったクラスを選択することが可能となっている。Expos 20のコース内では、読み物、映画、絵画など様々な素材に触れながら、少人数のクラスがディスカッションを中心に行われ、個々がテーマに従ってエッセーを書きあげる。指導教官と密な相談を重ねながらリバイズ(改訂)を重ね、学期で3枚のエッセーを仕上げることとなる。入学後に行われるクラス分け試験においてライティングスキルがExpos 20を履修するレベルにいたっていないと判断された場合、あるいはライティングスキルに不安がある場合は、そのひとつ前のレベルにあたるコースである、Expos 10を履修することも可能である。Expos 20はよりコースの内容を重視した総合的ライティングコースになっているのに対し、Expos 10はライティング自体の初歩、「書き方」を学びたい生徒が履修できるように設定されており、英語が母国語であるか、留学生であるかどうかを問わず履修されている。このようなライティングコースを必修としているのは、リベラル・アーツ教育が教養を重視するとともに、アウトプットを中心にした学者としての基本的な能力を非常に重視していることを象徴しているといえる。1年目に履修を要求されているこのコースを通し、リサーチの方法から、引用の仕方や論理の組み立て方まで、アカデミックな論文に要求される基本的な一連のスキルを習得することができるように設計されている。

② Foreign Language

外国語の履修はハーバードにおいても必須となっており、少なくとも2学期間の大学レベル相当の外国語のクラスの履修が義務づけられている。しかしながら母国語が英語と異なる場合、あるいは以前にその言語の学習経験があり、入学試験に相当するSAT、高校で履修可能な大学レベルのクラスのAP Examや入学後に行われる学内クラス分け試験で相当の語学能力が認められた場合などにはこの要求は免除されるなど、非常にフレキシブルなものとなっている。スペイン語や中国語、日本語などの一般的な言語のみならず、スワヒリ語、サンスクリット語や、

さらにラテン語などの古典言語にいたるまで、70以上もの言語のコースを提供している。ハーバードの言語教育はより実践的な必要性に即したものとなっており、ほとんどのクラスは週4、5回、ほぼ毎日授業、または少人数の演習セッションがあり、実践に即した独自のカリキュラムが組まれている。外国語のコース・デザインは他のコースとは一線を画するが、これについては後述することとする。

③ General Education (Gen Ed) Requirement²

General Education はハーバードの最も特色あるカリキュラムで、今年から Core Curriculum と呼ばれるカリキュラムをより進化させた形で導入されることとなった。これらは双方とも、リベラル・アーツ教育の理念に基づき、学部在学中に学生により幅広い分野の学問に触れ、教養を身につけるとともに、各々の本当の興味、関心を様々なコースを履修しながら探した上で今後の専門を決めることを薦めるためのものである。General Education には8つの分野が存在し、下記のとおりである。

- * Aesthetic & Interpretive Understanding (A&I)
- * Culture & Belief (C&B)
- * Empirical & Mathematical Reasoning (EMR)
- * Ethical Reasoning (ER)
- * Science of Living Systems (SLS)
- * Science of the Physical Universe (SPU)
- * Societies of the World (SW)
- * United States in the World (US/W)

各分野には、教員によってこれら General Education のために設計されたコースと、各部門のコースとして設計され、General Education の趣旨との合致から単位として認められるコース（たとえば国際関係論入門のコースがSWに当たるなど）が存在する。学生は学部在学の4年間の内に、各分野から少なくとも1つ以上のコースを履修しなければならない。この要件によって、学生は自然科学、社会科学、人文科学など幅広い分野からコースを選択することを強いられ、政治学専攻の学生が心理学や数学を、生物学専攻の学生が考古学を履修したりするような状況が生み出されるわけである。下級生の内にあるコースをたまたま履修し、あるいはその分野の教授に出会い、入学時に考えていた専攻を大きく転換する人がとても多いことを考えると、非常に有益なシステムであるといえるのではないか。

④ Concentration Requirement

前述の通り、学生は2年の内に専攻を決めることとなるが、部門に専攻として認定

されるためのコース履修要件は各専攻により異なる。ただ大抵の場合は、前述の1～3の要件を満たした上で、なお学生がその他に選択可能な自由選択科目の幅をあまり狭めない程度が設定されている。この要件は各デパートメントのホームページに明記されているが、たとえば比較的フレキシブルであるとされる政治学専攻を例に取ってみよう。通常の Standard Track と Honors Track の2種類が存在するが、後者が Senior Thesis (卒業論文) を要求されること以外にあまり大差はない。まず政治学デパートメント内に存在する4つの小学科、Political Theory、Comparative Government、American Government、International Relations の分野で提供されているコースから、それぞれ1コース以上を履修すること。そして Sophomore Tutorial (2年生用ゼミ)、Junior Research Seminar (3年生用研究リサーチセミナー)、Senior Tutorial (卒業論文の執筆用) をそれぞれ履修すること。それに加えて政治学デパートメントが提供するコースから任意で2コースと、政治学コースはもちろん中国語などの語学や経済学、地域研究や宗教学など、他のデパートメントによって提供される認定を受けた政治学関連科目なども含めたより幅広い範囲から3コース以上履修すること。このように政治学専攻の場合には、特定の必修クラスが無いばかりか、4年間32コース中、全てでわずか13コースの履修のみで認められるというフレキシブルなものとなっている³。場合によっては、コース履修、論文に加え、教員との面接による口頭試験などが要件に加わることもある。

⑤ Secondary Field Requirement (任意)

ハーバード大学では、Secondary Field と呼ばれる副専攻や Joint Concentration と呼ばれるダブルメジャーに当たるような専攻も認められており、学生個々の興味、関心に最も即した形で独自のカリキュラムを設計することが可能となっている。そのため各デパートメントには Concentration Requirements とは別に Secondary Field Requirements が設定されている。多くの場合、これは専攻要件よりもはるかに少なく、各デパートメントが提供するコースの中から、6コース程度を履修することであることが多い。数学と物理のダブルメジャー、政治専攻の経済副専攻など、関係が深い分野の学問をつなぐ役割を担う。

3 コース・デザイン：Course Design

(1) コースの履修

前述の通りハーバード大学ではセメスター制がとられており、8月下旬・9月上旬ごろから始まる秋学期と、1月下旬から始まる春学期に分ける。各学期において、一般の学生が履修を許されるのは、特別な事情が無い限り通常4科目、多くとも5科目のみに限られる。場合によっ

ては 6 科目までの履修が、担当者との相談の上で認められることもあるが、特例中の特例であり、5 科目を履修するのも困難であるから避けるべきであるといわれている。日本の大学において学生が履修する、学期あたり 13 から 15 科目といった科目数と比べてかなり少ない印象を受けるが、これはハーバード大学において学生に要求されている授業外における勉強量が相当なもので、各クラスで与えられるワークロードを加味すると、肉体的に 5 科目が限界であろうと考えられているためである。ただ、大学側は、ただ課題を与えて放任するのではなく、学生を全力でサポートするシステムを万全に整え、学生がまじめに取り組んでいる限り、助けが必要となれば常に相談しに行く人が存在するような環境を提供している。これは、大学側こそが学生を選抜したのだから必ず育て上げるという責任感の表れであり、多量のワークロードに精神的にも肉体的にも追い詰められる学生にとっては非常に心強いものとなっている。こうした学生をサポートするシステムは後述するとして、まずはコースの基本的な構成に触れたい。各学期の 1 週目はショッピング・ピリオド (Shopping Period) とよばれるオリエンテーション期間で、生徒は学期の履修のコースを見極めるため、好きな授業に参加することが可能となっている。生徒は授業料を払って、大学、教員が提供するコースを購入 (= shop) するという理解があることが名称の所以である。各コースこの週の最初の授業においてシラバスに基づいたコースの説明と講義の導入が行われる。このシラバスには授業の内容と進度のスケジュールとともに、学期を通して与えられるレポートや試験などの課題、詳細な評価基準、どの論文の何ページを読むかといった具体的なリーディング・リストまで、コースの内容を知る上で必要な情報の全てが記されている。4 科目しか選択を許されない学生にとっては、1 学期間密に付き合っていくこととなるコースを選別しようと、出来るだけ多くのコースに出席して見極めようとする一方、なるべく多くの生徒に履修してほしい教授側はこの学期初めの授業に、夏季休暇や冬期休暇を全て費やすとも言われる多大な労力と時間をかけて準備し設計してきたコースの真髄の全てを注いでくるとも言われており、活気ある 1 週間が展開される。レクチャー主体でも人気のコース、あるいはセミナーなどの履修人数が少なく設定されているコースに関しては、この週の内に Lottery (抽選) が行われ、履修できるかどうかが決まる。場合によっては教授が自分のコースを履修する生徒を選ぶために、レジュメや 1 ~ 2 枚のエッセーの提出を求める場合も存在する。先学期開講されていたグレゴリー・マンキュー教授による経済学のフレッシュマン・セミナー (1 年生用のセミナー) には、履修枠 10 人に対して 200 人以上の応募者が殺到するなど、場合によっては非常に高倍率ともなりうる。また、コースにおいて授業をフォローアップするセクション (後述) の時間、担当教員を決める抽選もこの週の内に行われ、ショッピング・ピリオド最終日の金曜日に Study Card を教務課に提出することをもって、

1 学期の履修科目と時間割が決定することとなる。履修を決定した後も、5 週目にわたるまでの期間は、コースの変更、追加、取りやめ、成績の可／不可制への変更などの措置が可能である。

(2) 講義とセクション

講義主体のコースを受講した場合、通常週 2～3 回、月水金、あるいは火木のスケジュールで講義を受講することとなる。「何限」といった時間割というものは存在しないが、講義の時間は 1 時間のものと、1 時間半のものが多く、一般的には合計すると 1 コースにつき週 3 時間ほどの授業を受けることになる。セミナー等の授業においては、2 時間といった授業も存在するため、学生はショッピング・ピリオドに、同じ時間にあるコースを避けながら履修を決定することとなる。大人数が履修している人気コースの中には、録画されて、欠席したあるいは復習したい場合にオンラインで再生することが可能なものも多く存在し、そうでないコースにおいても学生が各自で録音するなどの光景はよく見られる⁴。

より多くの学生が教授による一律な指導を受けられる、大教室におけるレクチャータイプの講義であるが、その欠点として、質問が挙がりにくい、ディスカッションが出来ない、そのためにコースに参加しているという学生個々人の意識が低下する、課題や試験の添削、指導や採点が大雑把になりがちなどの欠点が挙げられるだろう。そんな欠点を解消するために、ハーバードにおける講義タイプの授業の特徴としてセクション (Section) と呼ばれる少人数のクラスによるフォローアップが挙げられる。このセクションを率いるのがティーチング・フェロー (TF) と呼ばれる人物で、通常は大学院の PhD プログラムや専門職大学院 (Professional School: ハーバードにおいては医学部、ロースクール、行政大学院、ビジネススクール等) に在籍している、その科目を専門としている大学院生 (稀に学部の上級生) が担当する。クラスのカリキュラムを設計し、一連の講義を担当する教授 (faculty) とセクション・リーダーの中で指導的役割を果たすヘッド・ティーチング・フェローさらに各クラスを受講人数に応じたティーチング・フェローが密な関係を保ちながら、1 つのコースにおける「講師陣」を形成することとなる。レポート、論文の添削、評価、中間、期末試験採点などの裁量はそれぞれのセクション・リーダーにゆだねられており、学生へのよりきめ細かい指導を可能にしている。それがゆえ、学生にとっては教授と並んで、または上回るほどの重要な役割を担う存在である。

セクションの役割は多岐にわたり、クラスの進行において必要な、日時や場所、課題の期日の連絡、またその提出といった事務・ロジスティックの部分から、大人数のレクチャーではカバーしきれなかった部分の詳細の解説、レクチャー外で与えられている必読課題文献の内容の確認や検討、具体的な問題があるような理数系科目の場合はその問題演習、といったコースの

内容の核心に当たる部分まで、通常は 10 人以下の少人数、ディスカッション、Q&A ベースで進める。その役割の重さから、教授陣の中には「このコースにおいては、私が講義においてレクチャーすることよりも、セクションの中で学ぶことのほうが多い」という見解を持っている方も多く、セクションはほとんどの場合において参加が必須、非常に重要視されている。

(3) コース設計

授業が勉強の中心であると理解されることが多いと感じるが、ハーバードにおいて中心となるのはむしろ授業外の学習である。ハーバードのコースは主に 4 つの構成要素で成り立っているといえるであろう。①教授による講義、②授業外における論文や本のリーディング、③セクション、④論文、プレゼンテーション、試験などのアウトプット、である。ここから、先学期に私が受講した Government 20: Introduction to the Comparative Politics を具体的な例にとり説明したい。一般的な大教室におけるレクチャータイプの講義は、主にあるトピックに関して、歴史、人物や理論などの大まかな紹介、つまり教科書のような役割を果たしている。革命、政治体制といった個別のテーマについて、代表的な学者やその理論を対比しながら概説するのである。そしてシラバスにおいて、講義の進行予定とともに必ず事細かに明記されているのが、それぞれの授業に関する必読文献である。授業で紹介されたそれぞれの学者やその理論に関しては、授業外での必読課題として、それら理論が実際に発表された名著である学術論文の原本をそのまま読まされるのである。例えば革命であればマルクスの「共産党宣言」、民主化であればハンチントンの「第 3 の波」といった具合である。全ての理論が簡潔にまとまった教科書を用いることが多い日本の大学との最たる違いが、この原本を読むという点であろう。1 回の授業につき通常 5 ～ 6 の論文か本が基本で、週 300 ページほどのリーディングが課せられることもまれではない。これらのリーディングは、数冊の本を必読書として購入させられるほか、論文はオンラインの図書館データベースで共有されダウンロードするのに加え、コースパックと呼ばれる論文集に教授によってまとめられる。Gov 20 は通常の 1 学期間の入門コースであるが、そのコースパックでさえ、2 冊計 3000 ページを超えるボリュームであった。しかし、この膨大な量のリーディングを学生に対して丸投げにするのではなく、ここでセクションが大きな意味合いを持つ。毎週与えられるリーディングに対し、ティーチング・フェローが学生に質問を振りながらともに議論を進めていく形で、内容を確認するとともに、その主張に対し、解説、批判を加えていくのである。時には、仮想の国を設定して民主化の可能性を考えるなど、理論を実際に用いたケース・スタディもこのセクションで行われる。リーディングを終えていなければ、セクションに参加する意味は皆無となり、内容にもついていけなくなるた

め、学生に授業外でも学業に励むことを強いるような環境を与えている。日本のゼミと同様に、講義中心のコースにおいても、学生参加型の設計がなされているわけである。

そして最後の要素が、アウトプットである試験と論文であるが、ここに日本のそれとは大きな違いを覚えた。Gov 20 の初回の授業の冒頭で、論文を書く作業についての説明を以下のよう
に受けた。「これから君たちが読んで触れる論文、理論は、その道の一流研究者によって書かれたものである。入門のクラスにいる初心者の君たちが、そのようなものに意見したり、批判を加えたりということに躊躇してしまうのはわかるし、ある意味理にかなっている。しかし、それでも、自分なりの意見を持って考察を加えることが社会科学のエッセンスであるのだから、恐れずにやりなさい。」 Gov 20 においては、通常の政治学のクラスらしく、2 枚の 10 ページほどの論文と、1 時間の中間試験、3 時間の期末試験があった。論文はもちろん、試験においても、質問はとても抽象的なもので、「自分の意見」を書くことを求められる。誰がどうこう言ったという理論を覚えて並べるのではなく、それらを引用、利用して自分なりの結論を出すことを求められるのである。そのために、セクション・リーダー、ライティング・フェローと呼ばれる、このクラスのためだけにおかれるライティングの専門家、論文執筆の指導を行うライティング・センターと上級生のライティング・チューターなどが手厚いサポートを施しながら、右も左もわからない学部生に、学術論文の書き方を一から叩き込むシステムが整備されているのである。日本の大学においては、こうした指導の機会はあまり無かったように感じられ、大学に入ってから「作文」と「学術論文」の差も定かではなかった私にとって、これは衝撃であったし、こうしたシステムの整備は絶対に必要なものであると感じた。

(4) 言語コース

多くの言語コースはそのデザイン上、非常にインテンシブであると言われている。コースは大抵の場合週 2 回ほどの講義と、2～3 回の少人数演習セッションによって構成され、結果的に週 5 日、ほぼ毎日受講することとなる。ほとんどの授業がネイティブ・スピーカーによって教授され、また入門、初級クラスを含めてその言語で執り行われるのが大きな特徴である。ハーバード大学で提供される言語コースの中でも最も人気のある中国語の入門コースを例に取って、具体的に説明したい。

中国語のコースも典型的に、火曜、木曜と週 2 回の講義と、それをフォローアップする月曜、水曜、金曜の週 3 回のドリル (演習)・セッション、さらに教員と 1 対 1 で週 1 回ほど 10 分間、学生個々のニーズに合わせた指導が受けられるマン・ツー・マン・セッションが、どれも中国人のネイティブの教員陣のみによって構成されている。20～30 人の学生が参加する講義に

おいては、予習が絶対とされており、教科書のレッスンに沿って、新出の単語、文法などを確認する。しかしながら、講義とは言っても教員が常に生徒を指名し続け会話をしていく中で確認していく形を取っており、リスニングやスピーキングが中心となっていることに変わりなく、生徒の側からも積極的な質問が出る。一方ドリル・セッションは、講義で習った内容を用いながらより実践的な演習の場を提供しており、講義以上に、リスニング・スピーキングを重視して、対話を行う形で進められていく。また6～8人ほどの少人数のクラスであることを活かし、発音などの面においてもよりきめ細かい指導を可能にしている。初習外国語のコースであってもその言語で教えられることが多いが、英語と根本から異なる中国語においても、基本的には既習の範囲の中国語で講義、セッションが進められている。そして回が進むにつれ、より幅広い内容がその言語で表現できるようになると、授業中の質問、指示なども全て中国語で行われるようになるのである。生徒側にも、常に中国語を「話し」続けようという強い意識があり、授業前後の雑談、授業中の質問や発言なども、出来る限り自分の知識を駆使して、知らない語彙は英単語を交えながらも中国語で話そうという姿勢がみられる。

火曜、木曜の講義日にはほぼ毎回、ディクテーションか筆記の小テストが課され、またその他のドリル・セッションの日には毎日必ず宿題の提出が求められ、その全てが採点されて成績に直結してくるため、生徒にとっては毎日中国語に触れることを強いられる形となっている。宿題は、漢字の練習、リスニング、筆記を含んだ各レッスンの復習問題、さらにはメールに添付して提出するスピーキング練習の課題まで、バランス良くかなりの量を課せられる。この中国語入門クラスにおけるカリキュラムは教科書も含め手作りであり、宿題に加えて、レクチャー・ノート、文法練習問題、聞き取り練習問題、その他学習を助けるツールが全てオンラインのコース・ホームページに随時アップされている。その全てをこなせる生徒は少ないと思われるが、それでも平均して日に2時間ほどの家庭学習時間がとられている。裏を返せば、それほどの勉強を行わないと、全てが中国語で行われるこのコースには全くついていけず出席している時間が無駄になってしまうというわけである。中間、期末試験も存在するが、筆記試験はもちろん、スピーチやグループによる寸劇といったスピーキングの部分も同等に重視されており、出席点、日々の課題の成績などを含めて総合的に評価され、最終的な生徒の成績となる。なお、中国語のクラスにおいては絶対評価が取られているため、他の学生の成績に関係なく、全ての課題において90点以上ならA、80～90点ならBというような自動的な評価が与えられるため、高成績を狙う生徒にとっては常に気が抜けない環境となっている。

4 学習環境：Environment

(1) ダイバーシティ

ハーバード大学が最も重要性を主張していることに、学内のダイバーシティ、多様性が挙げられる。入学後、学部生は全て学内で4年間の寮生活を送ることとなる。中心部に点在する1年生用のドーム群、上級生が所属する13個のハウスと、大学関連の建物がいたるところに存在し、大学街としてのケンブリッジを構成している。経験も出身も国籍も全く異なる学生と4年間、生活の全てをともにする経験というのは、自己形成に少なからずの影響を与える。高校までと異なり、自分と同じ専攻、関心を有する人との付き合いが多くなりがちとされる大学において、寮生活をともにすることにより、専攻が全く異なる友人との交流も盛んにおこなわれることも大きな長所のひとつであろう。

国際性という観点においても、比較政治の講義に座りながら、両隣に座っているのはそれぞれイスラエルとパレスチナからの留学生である等、日々ダイバーシティを体感させられる。コースを引っ張る教員にせよ、ティーチング・フェローにせよ国際色豊かであり、参加するセッションでのディスカッションには必ず1人は他国からの留学生が座っていると断言しても過言ではない。政治専攻の一個人としても、日中関係に関して実際に議論する相手が中国出身の学生であるなど、非常に恵まれた環境にいることを日々感じる。

また研究型総合大学であることを活かして様々な分野における一流の研究者が世界各地から集っているのみならず、大統領、スピーチライターなど実務方面からも多くの人が招かれ勉強会、セミナー、講演会などのイベントが毎日のように行われている。こうしたイベントのほとんどはオープンであり、メーリングリストや掲示板を通じて情報が供されており、学部生にとってはかけがえのない機会となっている。学部、大学院、教員、外部の全てのネットワークがつながっており、人的交流が盛んであることは、この街の大きな魅力のひとつである。MITやBoston University、Boston Collegeといった近場の大学との交流が盛んであるのも大学街ならではであろう。

学内において生徒が行っている活動もまた多様である。長い歴史を持つハーバード・クリムゾンと呼ばれる日刊紙を発行する新聞社、レベルの高い学生オーケストラを始め、模擬国連、スポーツ・チーム、学生会議の企画運営、社交クラブ、人種団体、国際交流を主眼とする団体など、活動内容もレベルも多岐にわたる数多くの学生団体が存在しており、雑誌、学術専門誌の発行も行うプロフェッショナルなものも多い。こうした学生団体への参加とそこでのリーダーシップが就職時にも評価されるため、学生は通常5個以上にも及ぶ団体に所属し活動の

幅を広げ、より広い学内コミュニティーを形成している。学生の活動の範囲は学内のみにとどまらず、Gap Year と呼ばれる、学部在学中に1年休学をとって仕事、あるいはインターンシップを行う、または学期間や1年といった単位で海外の大学に交換留学に行くといった機会も大学側から強く推奨されており、資金面でのサポートも厚い。5年以上かけて卒業する学生が多いのもこのためである。

(2) オンラインでの情報共有

ハーバード大学においてパソコンを使いこなせないことはもはや致命的であると言ってもいい。コースの履修をはじめとする多くの事務手続きはオンラインで行われるし、各コースや学内で行われるイベントなどの情報は全てオンライン・ネットワーク上で行われる。コースにおいても、進度予定の掲示、テスト情報、レジメの配布、講義ビデオの配信、リーディングや練習課題の配布、課題の提出などその全てはコース・ウェブサイト上で行われ、ほぼ毎日更新されるため、ウェブサイトの確認は学生の義務ともなっている。講義のノートを取ることから、リーディング、レポートや論文の作成までを全てパソコンで行うため、学生のほとんどは常にラップトップを携帯している。筆記試験であることが義務づけられている中間、期末試験を除くほとんどすべての活動がデジタル化されているのが現状である。

また各学年、デパートメント、学生団体等がそれぞれメーリングリストを有しており、それぞれの内容と関連するイベントや情報を随時メールで流して共有している。学生は、自分の興味のある分野に関係ありそうなメーリングリストに多数所属することにより、学内で何が起きているのか全てを把握することは不可能とまで言われる膨大な数のイベントや情報から、関心のあるものをより多く入手することが可能となっている。1日にメールボックスに入ってくるメールの数は多いときには50件以上にも及ぶが、それだけ活発な情報交換がオンライン・ネットワーク上で行われているのである。

(3) 図書館

ハーバード大学の学内には大小多くの図書館が点在し、図書館ネットワークとしては世界最大の蔵書数を誇るとも言われている。最大の Widener Library (ワイドナー図書館) は全米2位の蔵書数を誇り、貴重な資料も多く有しリサーチの場として申し分ないことは言わずもがなであるが、それ以上に学生にとって大きな役割を果たすのが「勉強の場」としての図書館である。点在する図書館の多くには広大なスタディ・スペースが設けられており、ほとんどが寮生活を行っており自室に個室が保証されていない学生にとっては必要不可欠な場となっている。

中でも Lamont Library (ラモント図書館) は勉強の場としての図書館の中心的役割を果たしている。他の図書館が夜 10 時ほどで閉館するのに対し、祝休前日を除いて 24 時間オープンであり、所狭しと自習用の机が並んでいる。またよりカジュアルに、あるいはグループでも勉強ができるようにカフェやグループ学習室も併設されており、毎晩午前 3 時ほどまでは学生が減ることは無い。またこうした図書館や食堂といった空間は、違う寮に住む学生同士の貴重な交流の場ともなっている。

(4) サポート・システム

学生にとっては過酷になりがちであるハーバード大学での学生生活であるが、「我々が選んだ学生なのだから、徹底的にサポートして何があっても卒業させる」という大学側の強い意志が、そのあらゆる側面からの充実したサポート・システムに現れており、学生にとっては非常に心強い。学生ひとりひとりには、アドバイザーと呼ばれる個人的に相談できる人物が、少なくとも 5 人以上割り振られている。進路や履修に関する Academic Advisor、上級生の相談役である PAF (Peer Advising Fellow)、上級生である留学生の相談役である iPAF (International PAF)、寮の管轄・相談役である Proctor、より重大な事柄に対応する Resident Dean、その他にも挙げればきりが無い。私の身近にもすでに 1 学期間で 2 人の友人が大学を辞めてしまったが、こうした環境にいるからこそ常に相談が出来る人が存在するサポート体制は非常に重要なのである。大学内に病院も存在し、そこにいるカウンセラーの役割も大きい。学習面においても、学生個々の勉強計画や方法などの相談に乗りアドバイスを与え、リーディングやテスト勉強、リサーチの進め方に対するセミナーやワークショップなどを主催することも多い Bureau of Study Counsel、ライティングに関する相談や、セミナーを主催する Writing Center をはじめ、多くのサポート専門機関が存在し、学生の学習をサポートしている。

(5) Q Evaluation : 教員逆評価システム⁵

ハーバードの学生がコースを選択する上で大きな指標とするのが、Q Evaluation と呼ばれるコース、教員評価の成績である。Q Evaluation とは、Office of Register という履修に関する大学の事務局より運営されている、学生によるコースの内容や教員の逆評価システムである。生徒が履修した各コース、また教員に関する詳細にわたる 5 点満点の評価を事細かに集めてデータ化したもので、ほとんどの場合履修者の 90 パーセント以上が回答し、また数年にわたって蓄積されたデータであるため、その評価は学生の間で絶対的な信頼を誇る。評価項目は多岐にわたるが、一般的なところでは、コースへの評価として総合評価、リーディングの質、課題

の質、セクションの質、1週間の授業外学習の所要時間などが挙げられる。一方教員への評価としては、総合評価、興味と熱意を学生に芽生えさせたか、学生に討論や積極的なコース参加を促したか、効果的なレクチャーを行ったか、オフィス・アワーなどコース外でのアクセスの積極性、などが挙げられる。その他の詳細にわたる評価項目は各コースの内容により異なるが、言語なら言語の、セミナーならセミナーの、とコースのタイプに即した評価基準が一律に定められており、同じ部門の他のコースと対比させながら、コースを見極めることが可能となっている。また履修者からの、直接の感想、ないしはコメントをも読めるようになっており、未修者でもより具体的なコースを思い描くことが可能となっている。

匿名である学生は具体的かつ率直な評価を与えるため、Q Evaluation において一定の評価を稼ぐことは、次年度以降の履修者を増やすためにも必須であり、コースを提供する教員側にとってもより良いコースをデザイン、提供する大きなインセンティブを与えている。冬期休暇や夏季休暇の全てを費やすとも言われるほど、次年度のコース・カリキュラムの設計に積極的な教員が多いのはこのためであろう。また具体的な評価項目は、教員側にとってもコースの改善点などを浮き彫りにし、Q Score に基づいた教育の質の向上が行われている。この Q Evaluation によって高評価を獲得する教員に対する学生の信頼、尊敬は絶対的なものであり、上級生から下級生への口コミを通じて、その評価は伝えられ、非常に大きな影響力を持っている。ハーバード大学には世界的に有名な教授も多数在籍するが、学生側の認識としては、自らの研究において有名であるかによらず、この Q Evaluation の評価が高いコース、教員の質が最も高いとされており、研究ではなく教育の質を図るという点において非常に有用な尺度を提供しているのである。

余談ではあるが、研究型総合大学であるハーバード大学では、教員の「研究者」としての側面と、学生を前に教壇に立つ「教育者」としての側面の乖離が問題視されていた。大学で教壇に立つ以上は優れた「教育者」でなければならないという問題認識に基づいて、近年、教員を「教育者」として教育するための専門家を集め部門が設立された。コース・デザインや効果的なレクチャー、プレゼンテーションの手法、ディスカッションの作り方、生徒に積極的な参加を促す方法などの、極めた具体的かつ実践的な教授法に焦点を当てた教員教育プログラムへの参加を全員に求め、その結果教育の質の大きな向上に貢献したそうである。

4 ハーバードの休暇：Summer Opportunities

(1) 「第3の学期」としての休暇

本年度に学年歴の改変が行われたハーバード大学では、8月下旬～9月上旬から12月中旬ま

での秋学期と、1月下旬から、途中1週間の春休みを挟み、卒業式のある5月中旬までの春学期とする2期制がとられている。その間に、冬に1カ月と夏に3カ月ほどの2度長期休暇が取られるわけである。とりわけ夏季休暇は3カ月半の長丁場であるため、これを利用してほとんどの学生は、インターンシップ、卒業論文のための研究、フィールドワーク、プロジェクト、サマースクール、語学留学など、思い思いの過ごし方をする。普段は学校に缶詰な学生たちが、長い休暇を利用してそれぞれの興味にあったプランを設計し、自分の将来を考える上で貴重な経験をしてこようということである。ハーバードの学生にとって、夏季休暇は決して「休暇」なのではなく、通常とは内容が多少異なる第3の学期にあたるわけである。この休暇にある機会の一部を、下記に紹介したいと思う。

(2) サマースクール・プログラム⁶

ハーバードにおいては20以上のサマースクール・プログラムが提供されている。これは、現地の学術機関に通う通常の交換留学とは異なり、ハーバードの教員によって率いられた学生が世界各都市に行き、そこでその都市の特色、風土を活かしたコースを履修するというものである。通常2カ月であるこのコースは、通常の1学期に相当する単位として評価され、ゆえにももちろんレポートや期末などの課題も通常通りに存在する。いわゆる出張授業である。ハーバードの教員が現地受け入れ機関と協力しつつ、英語で授業を行うのが通常のスタイルであるが、海外に行くことを活かした多種多様な語学のコースも提供されている。中でも北京で行われるサマースクール、Harvard Beijing Academyは名高く、密度が高いため2か月で通常の1年分の中国語を習得するように設計されている。こうしたサマースクール・プログラムは、全米の各地の大学がそれぞれ企画、実施しているわけであるが、アメリカにおいて優れているのは、こうした各大学のプログラムがOffice of International Programと呼ばれる国際関係、留学の業務を取り扱う事務局により共有されており、どこの学校のサマースクール・プログラムに関しても出願することが可能なシステムが構築されている点にある。それに加えて、こうしたプログラムのほぼ全てが単位互換となっており、自校の単位として換算されることも大きな魅力のひとつだ。たとえば、同じ中国において中国語を学ぶプログラムにしても、ハーバード、ミドルベリーをはじめ、数十もの大学が特色ある独自のプログラムを提供しており、学生は自分の語学レベル、目標など、細かいニーズに合わせてプログラムを選択することが可能である。こうしたシステムにより、世界中のほとんどの都市、そして大抵の勉強内容がカバーされていて、学生は専攻、興味に基づいてほぼ無限大の選択肢の中から、自分に最適なプログラムを自由に選択することができることとなっている。

(3) インターンシップ

サマースクールに並んで学生の間で選択されるのがインターンシップである。アメリカのインターンシップは日本のそれよりはるかに整備されており、企業側は学生を雑用に使うのではなくしっかりと「教育」するシステムを整えている。全米の大学のほとんどが夏季休暇となるこの3カ月に照準を合わせ、各企業はインターンシップの募集をする。これを利用して個人で応募するのがインターンを行うひとつの方法である。こうした各企業のインターンシップの情報は、Office of Career Service というキャリア支援の事務局や、こうした夏季休暇の機会を専門に扱う事務局により統括、整理されて告知があるほか、インターネット上で容易に検索可能なように整備されている。アメリカにおける企業の採用はインターンに始まるとも言われており、企業側が大学に赴きインフォメーション・セッションを開くことも多々あり、こうした情報も学内のメーリングリストにより共有される。このように多種多様なインターンシップが存在するため、学生に思い浮かぶ限りの職種はほぼカバーされている。また、Office of International Programをはじめ、有名どころでは Weatherhead Center of International Studies、Reischauer Institute of Japanese Studies、David Rockefeller Center for Latin American Studies をはじめとする各研究機関、地域研究所が、独自の人脈を駆使したそれぞれのネットワークを通して、海外でのインターンシップの機会も提供している。たとえばライシャワー研究所に関しては、既存のインターンシップのみならず、学生の希望する内容に基づき、冬期、春期休暇を利用してディレクターが自ら日本に赴き、企業や団体と会合を持ち、各々の学生の希望する内容、期間に合ったインターンシップを取り付け、つまり「創出」してくれる。この辺りが、大学側がしきりに、「ハーバードにおいて可能性は無限大であり出来ないことは何もない。何かアイデアがあればとにかくまずは身近な人物に相談してみなさい」と学生を煽る根拠であろうか。

(4) 奨学金（グラント）

前述のサマースクール・プログラム、インターンシップの他にも、実際に他の学術機関に赴いて研究を行うであるとか、世界各地の大学との夏季短期交換留学、目的を有した海外旅行、ボランティアやコミュニティー・サービスのプロジェクトや、主に3、4年生向けの卒業論文に向けたサマリーサーチをはじめ、学内外から提供される機会は数え切れず、それこそ学生が何かやりたいことがあれば、まず出来る環境にあるといえるであろう。自分自身のプロジェクトを立ち上げる場合なども相談に乗ってくれ、大抵の場合は何らかの形をとって実施することが可能となる。そうした場合大きな懸念となるのが資金面であるが、ハーバードの生徒の夏季

活動に対するグラントと呼ばれる奨学金は非常に充実している。学内の各研究機関、地域研究所が、自らの専門に関係する活動を行う学生に対しそれぞれ返却不要の奨学金を賞与するのである。学生は自分の夏季の計画について具体的かつ詳細なプロポーザルを書き、動機や目的を明記したうえで具体的に何にいくら必要かというバジェットを要求し、教員からの推薦状やその他の必要書類とともにこうした奨学金にアプライすることとなる。奨学金は、各機関によって対象となる内容、必要な項目など多種多様にわたるが、これが CARAT と呼ばれる共通アプリケーションを通して全て同時にアプライ可能となっており、各機関は相談を重ねながら、どの生徒にいくら賞与するかを慎重に専攻する。考古学を専攻している友人は、昨夏南米において教授について発掘作業を行った上に現地で語学を勉強する計画を立て、必要経費 6000 ドルほどをほぼ奨学金で勝ち取った。奨学金は非常にコンペティティブであるが、大抵の場合は多額の資金援助を得ることが可能であり、学生が夏季に何らかの活動を計画する上で大きな助けとなる他、自らの計画について今一度深く考えさせる機会を与えている。

5 学内雇用の意義：Job Opportunities

(1) ハーバードにおける学内雇用

ハーバードのほとんどの学生には、かなりの額の奨学金が付与されており、その授業料により生活に困ることはまれであるが、自らの趣味や活動、夏のプロジェクトなどに充てるための資金として、仕事が必要なものもまた事実である。日本と同様に学外においてアルバイトを探すことももちろん認められてはいるが、学業の障害となるという理由で通常はあまり薦められていない。その代わりとして学内において様々なパートタイム・ジョブが提供されている。学生は皆寮生活を送るためその寮の掃除を行うドームクルー、学内に散在する多数の図書館の司書のアシスタント、さらには入試事務局であるアドミッションオフィスと、代表的なものだけを挙げてもきりが無い。それぞれの事務局、研究機関が必要な人材を募集するわけであるが、Office of Career Service がこれを統括し、随時情報提供や募集などを行っている。大学側が学生のパートタイム・ジョブを統括することの長所は少なからずある。第一に、時間などの制約が緩いことが挙げられるであろう。大学関連機関は学生のスケジュールを考慮し、フレキシブルな日程で適切な仕事量、内容を与えることができ、外部でアルバイトする場合よりも学生にとってはより学業に集中できる環境となる。学内で行われるため移動時間が不要である点も大きい。第二に、賃金などが非常に好条件であることが挙げられる。もちろん仕事において賃金の差異はあるが、ほとんどの仕事において、学生は時給 11 ドル～ 15 ドルの好条件で大学

側に雇われる形となり、これは外部で働く場合よりかなり魅力的となっている。

(2) 人的リソースとしての「学生」

学内雇用の最も魅力的である点としては、パートタイム・ジョブを通じて人的リソースの有効活用が行われているという点が挙げられるであろう。事務作業などの、専門性があまり必要とされない仕事を学生が担当することにより、専門・事務職員の負担軽減、また正規雇用を減らすことによる経費削減が可能となり、学生にとっても通常より高水準の賃金を得られることとなっている。また採算面以外においても、このシステムは非常に有効である。代表的な職業のひとつに、研究所、研究室でのリサーチ・アシスタントがある。研究所や教授にとっては、ライブラリー・リサーチや書類の処理といった負担となるような作業を学生に任せ、負担を軽減することができる一方、学生にとっては自分の分野における世界の最先端の研究を間近にし、実際にその一端を担うことが可能であり、貴重な経験となり得る。教員と生徒の間をつなぐ機会として、大学の人的ネットワークの構築にも一役買っているわけである。チューターと呼ばれるシステムもそのひとつだ。あるコースを履修し、好成績を取めた学生、あるいは言語などにおいて技能が備わっている学生に関しては、そのコースのチューターとなることが可能となる。もちろん、学生には教授の他にも、前述のセクション・リーダーと呼ばれる大学院生、論文に関する指導を行うライティング・チューターを始め数え切れないほどの手厚いサポートがあるが、それでもさらにきめ細かい指導が必要だと感じた場合には、大学を通してプライベート・チューターをつけることが出来る。1対1であるから時間や内容は学生の要望通りにフレキシブルに設定可能であるし、一方上級生にとっては、自身の技能や以前に勉強した内容を活かして後輩の勉強を助けつつ稼ぎを得ることが可能である。賃金の大半は大学側から支払われるため、下級生は手軽にチューターをつけることが可能となっている。特に語学関連などの、「実践」が必要なコースに関してはその効果は顕著であり、キャンパスの国際色を活かして、ネイティブ・スピーカーの留学生がその言語を学ぶ学生の練習相手になることも多く、授業外での練習の場を提供している。逆に、企業派遣の大学院生や研究員など英語に不自由している方のために、ネイティブの学部生が英語の指導に当たるといったケースも良く見られる。こうしたチューターシステムは、学生の勉学を助けることのみならず、学年、世代、専攻やスクールを超えた人的ネットワークの構築といった意味でも、非常に大きな役割を果たしており、特に学部生にとっては大学院で専門的な勉強をしている方と触れ合い、経験を聞ける貴重な機会となっている。他にも挙げればきりが無いが、前述のように、専門性に秀でた大学院生はセクション・リーダーとして教員陣の一員として教える側に加わることにより、自らの専門を活か

しつつ授業料を賄えるほどの金額を稼ぎながら大学院で学ぶことを可能としているし、同時に博士課程の学生にとっては、今後教壇に立つことを見据え、実際に授業を「教える」貴重な経験となる。大学は学生を貴重な人的リソースのひとつであるとみなし、積極的に最大限利用することによって、無駄を省きつつより幅広い機会を提供、かつ全員がその恩恵にあずかれるシステムを構築している。

7 おわりに

ハーバード大学に来てまだわずか2学期目であるが、ともに短い期間ながらも日米双方の教育システムを経験した身として、その違いは日々痛感する。異なる文化を背景に存在するシステムも存在するし、またそれぞれに長所、短所は多く存在するものであり、一概に議論できるほど単純なテーマではないことは確かであろう。しかしながら、ハーバード大学の環境に関して学生の立場からひとつ言えることは、この大学の気風は学生に自信を与え、積極的な挑戦を促進しているということである。

大学側が常々に我々学生に主張していることはいくつかあるが、一番大きいのが「リソースを使え」ということである。中でも大学側が一番自負しているのが、著名な教授陣、世界中から集まった研究者・大学院生、ダイバーシティーにとんだ学部生、それらの全てを含んだ人的リソースである。これらの人的ネットワークを学生に積極的に利用しろということ、日々訴えてくる。「1学期間に受講したコースで出会った教授の中から、少なくとも1人との間には一生続く関係を築け」であるとか、「興味があるなら積極的にオフィス・アワーを利用して教授と話してみろ。雑談でもいい、彼らは君ら学部生と話することが楽しくて大学にいるのだから」であるとか、とにかく積極的に動いてハーバードの人的ネットワークを利用することの重要性をことあるごとに学生に訴えかけてくる。

人的リソース以外の部分に関して、「学外にも積極的に飛び出して、リーダーシップをとって何かをやってみろ」であるとか、「今までになかったものを創出してみろ、可能性は無限大であるのだから」と、かなり大げさな言葉を駆使してまで学生を煽ってくる。このように大学側はいたるところで各学生が積極的かつ主体的にイニシャチブを取って行動することの重要性を盛んに示し、実際にそれを徹底的にサポートする体制を整えていることにより、生徒が自由に活動できる環境を生み出している。こうした可能性を見せながら、もっとも重要なことには、学生自身に自信を与えている。入学式での学長の言葉を借りれば、「君たちは30000にも及ぶ出願者の中から我々が選んだのであり、責任を持って君たちのための最大限のサポートを約

束する。ハーバード大学の長い歴史の中で最もダイバーシティに富んだ素晴らしい学年である君たちを、我々はみな誇りに思っているし君たちもそうすべきである」と。こうした大学側の態度と行動ひとつひとつが、学生が主体的に動いて挑戦できる気風を生み出し、コースワーク、学生団体の活動や人的ネットワークの交流をも含めて、非常に活気のある大学環境を形成しているのではないかと強く感じる。価値観、評価基準、なにからなにまで根本から異なる異国の地の大学ではあるが、そうした環境が学生にとって非常に好ましいのは万国共通であるのではないだろうか。

註

- 1 詳しくは、Harvard College Writing Program (<http://sites.harvard.edu/icb/icb.do?keyword=k24101>)
- 2 詳しくは、<http://www.generaleducation.fas.harvard.edu/icb/icb.do> を参照
- 3 <http://www.gov.harvard.edu/undergraduate-program/concentration-requirements/requirements>
- 4 通常はコース履修者のみがコース・ウェブサイトにて視聴可能となっているが、場合によっては全体公開されていたり、Michael Sandal 教授の Justice 等、Youtube 上で公開されているものもある。
- 5 <http://q.fas.harvard.edu/harvardQ/qguide.jsp>
- 6 <http://www.summer.harvard.edu/2010/programs/abroad/default.jsp>